

「RITCHEY の道筋」 ～サンフランシスコ周辺から始まる自転車ロジック～

前回 Vol.38 での「WTB」に続き、今なお強い影響力を持つ「RITCHEY」訪問を近況交えながら再編集でお届けします。

▷それは 20 年前、9.11 アメリカ同時多発テロ事件直後の 2001 年 9 月下旬。日本発米国行きユナイテッド航空機内は重い静寂、聴こえるのはジェット音と乗務員の言葉数少ないアナウンス、非常に緊張感のあるフライトだったことを記憶しています。

サンフランシスコ郊外の「スカイラインハウス」を訪れたのは 10 月 5 日のことでした。

▶『Tom Ritchey トム・リッチー』は、シニアキラーと言われたジュニアロード選手時代の直後からフレーム作りを実践し、マウンテンバイクのパイオニアの一人として尊敬される RITCHEY 社の創始者です。

彼が無名時代から製品開発に勤しんだハウスは、サンフランシスコ郊外、つづら折りの山深い峠道（スカイライン）を登った頂近くの高原地帯、道行く車も少ない大自然の中にあり、当時は数ある仕事場の拠点となっていました。起伏あるフィールドはオンオフのルートに恵まれ、自分で作って自分で試すスタイルは一貫していて、フレームやパーツの開発のために殆どの時間を過ごすエリアです。

トム・リッチーはこの標高 650m くらいの「スカイラインハウス」に片道約 1 時間半かけて海に近い自宅から“通勤”していました。当時 1 週間に 320km がコンスタントと言うことで、走ることを考えることが一体化していることを印象付けられました。少し哲学者を思わせる雰囲気には「**RITCHEY LOGIC**」と、リッチー製品の根幹にある大それたようなその言葉をも、素直に納得させてしまうような崇高感があります。



▲少し到着が遅れながらも颯爽と自転車で現れた彼は、長い峠道を走ってきたと思えないほど普通に会話を始め、コーヒーをいれてくれました。彼はその時、発売直前のフレーム 2 分割「BREAK-AWAY」ロードのテストバイクに乗っていました。



▶仕事場はよく有りそうなアメリカの工房風ですが、特徴でもある肩からフレームを下げて溶接するスタイルの為もあるのか、作業台や機械は少ないように感じました。整理整頓されているようには見えず、自由な感性の場という印象。



◀最近のトム・リッチー。米国自転車界で自らのブランドを立ち上げて一番成功した人、と言われています。しかし、羊とか追っていきそうな雰囲気も仕事場の雰囲気も当時と変わってません。東京サンエスとは 30 年以上の関係になります。

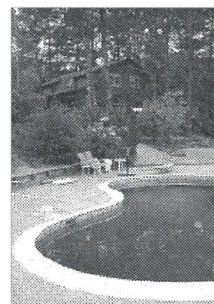
▶当時から表札などは無かったのですが、この写真は最近のもので。訪問時は戸鍵も無く「先に着いたら勝手に入っておいでね」と言うことでした。



▲軒下には自らの多数のテスト自転車が重なり合い、その全てがリッチーレッドの赤色に塗装されていました。ロード・クロス・シクロクロス・MTB・オールラウンド・よくわからないようなものなど…。



▶自らの手で小屋を建てたり、結構大きなプールもあってそれも手作り。素人技とは思えません。敷地は野球場ほど。



◀パーツのアイデアをその場で絵に描いて見せてくれました。彼はまずこうやってアイデアを伝えるんだと、その後に工場の社長に教わり驚きました。殆どのアイデアは 20 年以上前から温めているもので世に出ているのはほんの一部・・・と。MTB 時代以降、今世にある多くの製品がリッチーから影響を受けているとも言えます。

▶今なお前進し影響を与え続ける「トム・リッチー」。40 年近く前、ゲイリー・フィッシャーと共にサンダル姿で伊丹空港に降り立った初来日の彼らを国内の工場に案内した知り合いは、自転車に対する心がその当時から今も変わらないことが不思議だと言います。

東京サンエスの近年オリジナル製品の一作目は、当時創業間もない台湾の工場社長に依頼したのですが、縁もあって後に「トム・リッチー」の製品作りも行うことになり、技術もセンスも一気に世界の一流となっていった姿を目の当たりにしました。弊社も工場のクオリティが上がったことにより恩恵を受け、それは他の工場でも同じで、彼の影響が色々な製品作りに陰日向で及んでいることは知られたところ です。

▶数年前のある時、オンロードもディスク化が進み、リッチーもクロモリで 1 インチから 1-1/8 インチに移行したヘッドサイズをもう少し太いものに変えるか、という寸前まで行ったことがありました。フォークもカーボンで新たに作っており人知れずテストを繰り返していました。しかし最後の最後で彼は上下 1-1/8 インチを買いました。時代の流れを否定せず、取り入れるものは取り入れるものの、譲れないところは妥協しない。スカイラインで走りこんだ挙句のそのギリギリの判断とセンスは、類稀な天才と言われる彼のごく突端の姿なのでしょう。

訪問時、乗っていた赤いフレームに少し不釣り合いな感じで星条旗が下げられていました。



“9.11 戦争の終結”と言われる今も彼はリッチーレッドでスカイラインを疾走していることでしょうか…。

ともあれそのロジックは“**MY BIKE IS MY OFFICE**”なしには実現しないものなのでしょうから。

